

# 志都歌考

吉田修作

## 序

本稿で取り上げる志都歌とは、古事記の仁徳記において天皇とイハノヒメ皇后の歌（古事記歌謡五七～六一、六三）の「志都歌の歌返」うたひかへし六首、同じく仁徳記の枯野からのの琴の「志都歌の歌返」（古事記歌謡七四）、雄略記の天皇とアカキコの歌のやり取り（古事記歌謡九一～九四）の「志都歌」四首、同じく雄略記の天皇に唱和したヲドヒメの「志都歌」（古事記歌謡一〇三）、さらに古事記歌謡九一と同歌が琴歌譜に所載されている「茲都歌」と「歌返」を指す。志都歌に関しては、古事記伝が静かなる調子の意として以来、諸注や多くの論が従っているが、折口信夫が鎮魂説を唱え、記紀歌謡全註解などが賛同している。二つの説は歌い方から歌の内容に踏み込んだものとの違いであって、相反するというわけではない。本稿では、志都歌の歌謡と物語、地の文との繋がりが、特に仁徳記では日本書紀仁徳紀との比較を通して、志都歌の内実について検証していく。

## 一 「足もあかがに」と「言立つ」

仁徳記において天皇とイハノヒメ皇后の歌の背景にはイハノヒメの「嫉妬」という状況があるので。まずそこから考えていく。以下「嫉妬」の表記でウハナリネタミと訓む。

其の大后石之日売命は、嫉妬すること甚多し。故、天皇の使へる妾は、宮の中を臨むことを得ず。言立つれば、足もあかがに嫉妬しき。(仁徳記)

右の引用の最後の「足もあかがに」は足をばたばたさせる、地たんだを踏むことなどと解されているが、他に例を見ない語句である。ただ、「足もあかがに」は、万葉集の浦島子を詠める歌で、ワタツミノ神のをとめからもらった玉クシゲを開いてみると、

白雲の 箱より出でて 常世辺に 棚引きぬれば 立ち走り 叫び袖振り 反側び 足ずりしつつ……(巻九・一七四〇)

の「足ずり」と所作としては近似する。この歌の箱から出た白雲が何を意味するか解釈が様々あり、勝俣隆は丹後風土記逸文の浦嶋子などを参照し、神仙の蓬莱山にあったと信じられていた不老不死の薬と説く。ただ、右の万葉集には神仙の蓬莱山の影響は認め難い。他に考えるに、「足ずり」と同時に行った所作の中の「袖振り」が万葉などに多くの例が見られるように、魂を乞う動作であることは知られている。ここから考えるに、箱から出て来て常世辺に棚引いていく白雲は浦島の魂を示し、「袖振り」や「足ずり」などの所作は魂が抜けて異界に行くのを引き留める行為として読める。この「足ずり」の例から判断するとイハノヒメの「足もあかがに」の所作は何らかの魂を呼び戻す行為との解釈が可能となる。その場合の魂とは自分のものとは言えず、天皇の他の妾達の行為によつ

て自分から遠ざかっていく天皇の魂を呼び戻そうとするが「足もあかがに」ではないか。

別に、青木周平は右の仁徳記の「言立つ」に注目し、仁徳紀二年正月の歌謡などを参照する。

貴人の立つる言立儲弦絶ゆ間継がむに並べてもがも（書紀歌謡四六）

仁徳がイハノヒメに歌ったとされる歌で、身分のある人がはつきり言明することに、予備の弓弦を本弦の切れた時に備えて用意しておくというが、そのようにあなたのない時のために、八田皇女を並べておきたいものだと、八田皇女を側におく理由を述べたものである。他に「言立つ」は万葉集の家持歌に四例、特に知られた所謂「出金詔書歌」に

……大君の 辺にこそ死なめ 顧みは せじと言立てて 大夫の 清きその名を 今の現に 流さへる 祖の  
 子等そ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立て……（卷一八・四〇九四）

とあるように、「言立て」は正式な言明として用いられる。それらの例からすると、当該の仁徳記の「言立つ」は仁徳の妾達が公言した意と解される。それらを含めて青木論文では「古事記の〈嫉妬〉には、公的、呪的要素を窺わせる質がある」とするが、どうであろうか。確かに、「言立つ（て）」は他の事例を見れば、「言挙げ」や「言霊」に繋がるようなことばの呪的、特異な使用方法が想定されるが、仁徳記の場合、「言立て」の主体が妾達であるから、公的とは言い難い。

## 二 イハノヒメの「嫉妬」・仁徳記・仁徳紀

その妾達の「言立て」によって、イハノヒメの「嫉妬」が引き起こされたわけだから、その「嫉妬」の内実も検

証する必要がある。「嫉妬」は旧訓の一部にネタミとある以外は旧訓の大部分や諸注一致してウハナリネタミと訓じている。ウハナリは、よく知られた神武(記)紀の久米歌の中に「うはなりが肴<sup>なご</sup>乞はさば」の例に見られるように、コナミ(前妻)に対する後妻、新しい妻を指す。従って、ウハナリネタミは前妻から後妻に向けられた感情とすることになる。別稿で扱ったことであるが、「嫉妬」の例は古事記神代記ヤチホコノ神の神語において、「適后」スセリヒメ(前妻)がヌナカハヒメ(後妻)に対して「嫉妬」したとあるのを起源とする。それと同様に、仁徳記では「大后」イハノヒメ(前妻)が妾達に対する感情が「嫉妬」なのであり、「足もあかがに」という所作は天皇の気持ちをごちらに呼ぶ戻すとともに、妾達への激しい怒りを示すものでもあった。そして、イハノヒメの「嫉妬」はその後も特定の後妻に対して続く。イハノヒメの「嫉妬」を扱った論は従来からあるが、それがウハナリネタミであることが十分に認識されていないものが多い。<sup>(4)</sup>イハノヒメの「嫉妬」は恋愛から派生したには違いないが、その怒りの対象がウハナリに向かつていくものであることを看過してはならない。

仁徳は、吉備の海部直の娘クロヒメの容貌が端正であると聞き、召し上げる。しかし、クロヒメは「大后」イハノヒメの「嫉妬」を畏みて本国吉備に逃げ帰った。天皇は高台からクロヒメの船出していく様を見て歌った歌。

沖方<sup>おきへ</sup>には 小船<sup>せふね</sup>連らく 黒鞆<sup>くろづや</sup>の まさづ子<sup>まぢ</sup>我妹<sup>わが妹</sup> 国へ下らす(古事記歌謡五二)

大后はこの御歌を聞き、「大きに怒りて」、人を遣わしてクロヒメを船から下ろし、徒歩で歩かせて追いやったという。イハノヒメの「嫉妬」という点から言えば、大后が「大きに怒りて」とあるのは、天皇よりもクロヒメに対する感情と行爲と見なされる。

大后イハノヒメが「大きに怒りて」という記述はその後にも見出せる。その後に大后が豊楽<sup>とよあかり</sup>をしようとして、御網<sup>つな</sup>柏<sup>かしは</sup>を採るために木の国にいでました間に、天皇が八田若郎女<sup>やちいらつめ</sup>と婚したという。そのことを侍女を通じて間接的に

聞いた時、

太后、大きに恨み怒りて、其の御船に載せたる御綱柏をば、悉く海に投げ棄てき。

とある。この「太后、大きに恨み怒りて」もクロヒメの時と同様、イハノヒメの怒りの矛先は天皇よりも、その相手の八田若郎女に向かっていると考えた方がよい。その怒りを抱えたままイハノヒメは「宮に入り坐さずして」堀江を廻り、山代に上っていくが、宮に入らないのも相手の八田若郎女に逢わないようにするためである。山代に上りながら太后が歌った歌が記述される。

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河の上へに 生ひ立てる 鳥草樹きしぶを 鳥草樹の木 其しが下に 生ひ立てる 葉広 齋ゆつ真椿 其が花の 照り坐し 其が葉の 広り坐すは 大君ろかも (古事記歌謡五七)

志都歌の一首目に相当するこの歌の内容は基本的には大君賛歌であるが、イハノヒメが「嫉妬」しているのに、大君賛歌はその場にふさわしくないのではないかとというのが諸注釈を含めて大半の意見である。しかるに、前述したように、イハノヒメの「嫉妬」は相手の女性に対してであり、天皇には直接向かっていないことを理解すれば、イハノヒメが大君賛歌を歌うのも納得がいく。右の歌の異伝歌が日本書紀にも掲載されているが、賛歌部分が短縮され、古事記歌謡のような純然たる賛歌とは言い難い。仁徳記と仁徳紀はかなり天皇とイハノヒメとの関係の語り方に差異が認められ、次に仁徳紀を見てみる。

まず、大きな差異は仁徳紀にはイハノヒメに対して「嫉妬」という語が用いられていないことである。勿論、仁徳紀にも天皇とイハノヒメをめぐる感情のもつれが記述されているが、例えば、新編古典全集日本書紀では仁徳紀二二年から始まる記事を「天皇と皇后の不和」との見出しを付けて表示している。これは新編全集の解釈には相違ないが、少なくとも皇后の「嫉妬」とは表記されないのである。その仁徳紀二二年正月の記事では、天皇が皇后に

語つて「八田皇女を納れて妃とせむ」と言われたが皇后は「聴したまはず」となる。天皇が皇后に「語る」のは味方に引き入れる意図を示すが、皇后はそれを「聴す」ことはしない。これは、古事記の「嫉妬」と異なり、皇后が天皇の申し出を受け入れずにいるのである。天皇は歌によって皇后の気持ちを鎮めようとして皇后に歌い掛け歌のやり取りが始まる。天皇の皇后に対する一首目の歌は前掲の「貴人の……」書紀歌謡四六で、次は皇后、天皇と交互に歌を交わす。

衣こそ 二重も良き さ夜床を 並べむ君は 畏きろかも (書紀歌謡四七)

おしてる 難波の崎の 並び浜 並べむとこそ その子は有りけめ (同四八)

夏虫の 蛾の衣 二重着て かくみやだりは あに良くもあらず (同四九)

朝妻の 避箇の小坂を 片泣きに 道行く者も 偶ひてぞ良き (同五〇)

これら四六番歌から始まる天皇と皇后の歌の掛け合いは、天皇の「並べてもがも」(四六)を受けて皇后が「並べむ君は 畏きろかも」と応酬、それに対して天皇が「並べむとこそ その子は有りけめ」と巻き返し、次の皇后の歌はそれらを「蛾の衣 二重着て」と転じる。最後の天皇歌は「道行く者も 偶ひてぞ良き」と女性二人で行くのも良いものだと弁解めいていうのに、皇后は「黙して亦答言せず」に問答が終了する。これは皇后が天皇の行為や歌の内容を受け入れ難い意思を示している。そして、これらは古代歌謡全注釈などが指摘するように、歌垣などにおける歌のやり取りに発した歌の掛け合いを想起させ、答えをせずにそこで終了するというのもそれらの歌の掛け合いの様式に即している。

因みに、仁徳紀ではその即位前紀にオホサザキ(仁徳)とウヂノワキイラツコが皇位を譲り合い、最終的にはウヂノワキイラツコが自害することで、オホサザキが即位することになる。古事記ではウヂノワキイラツコが突如「崩」

じたと記されている。これらに関する歴史的な事実解明に関しては様々な見解が提示されているが、ここでは歴史的な実態を問うのではなく、記紀にどのように記述されているかが肝要である。仁徳即位前紀では自害したウヂノワキイラツコをオホサザキの身体を揺すって甦らせ対話するというように描写されて、斎藤英喜はそれらの場面からオホサザキのシャーマン性を読み取っているのは興味深い。そして、甦ったウヂノワキイラツコがオホサザキに同母兄妹の八田皇女を妃の一人に入れて欲しいと言いつつ残して絶命すると記載されている。仁徳紀の文脈からすれば、仁徳となったオホサザキが八田皇女を妃とすることはウヂノワキイラツコの言わば遺言に従ったということになる。

ここで再度仁徳記と仁徳紀の差異を示せば、前者が前述したように、イハノヒメは「嫉妬」によって、後妻である相手の女性達に感情を向けていったのに対し、仁徳紀では天皇と直接対峙して「聴さず」という態度を取っていることである。仁徳紀三〇年九月に、古事記と同様にイハノヒメは紀の国に御綱柏の葉を取りに行き、その帰途、皇后、難波の済わたりに到り、八田皇女を合めしつと聞こしめして、大きに恨みたまふ。

とあるが、その「恨み」は天皇と八田皇女の双方に対する感情であり、ここでも古事記との差異が見て取れる。

### 三 仁徳記の「志都歌の歌返」と仁徳紀

仁徳紀三〇年九月では、イハノヒメが山代河を遡る時の歌も古事記に比べて簡潔な天皇讚美で終わっている。

つきねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河隈かはくまに 立ち栄ゆる 百もも足らず 八十やそ葉の木は 大君ろかも

(書紀歌謡五二)

一応天皇讚美の内容とはなっているが、形式的なもので、感情が籠っているとは言い難い。イハノヒメはこの歌を歌って「那羅山を越え、葛城を望めて」さらに次の歌を歌うことになるのだが、仁徳記では「那良の山口に到り坐して歌ひて」とある。那羅山は倭と山代の境の山であるから、仁徳記でその山を越えて歌うことは、イハノヒメが天皇の難波の都に戻る意志のないことを示すことになり、仁徳記のその山口で歌う場合はその境界での行為なので、難波の天皇へ向かう気持ちも残しているという微妙な差異が認められる。ただ、歌では記紀ともに、那羅山を過ぎ、イハノヒメの出身地、葛城に赴こうとする。

つぎねふや 山代河を 宮上り 我が上れば あをよし 奈良を過ぎ 小楯せだて 倭を過ぎ 我が見が欲し国は

葛城 高宮 我家の辺りわぎへ (古事記歌謡五八、書紀歌謡五四)

古事記では志都歌の二首目となるが、記紀ともに葛城には向かわず山代の筒木に留まることになる。右の歌は道行的望郷歌とか巡行叙事歌なども説かれているが、この歌の詞句で問題になるのは「宮上り」という表現である。契沖厚顔抄はこの「宮」をその後イハノヒメが滞在する「山代の筒木宮」と解して、思想大系古事記が従っている。ただ、この解は山崎かおりが疑問を呈するように、この歌が歌われた時点で「山代の筒木宮」が存在したかは疑わしく採用できない。宣長の記伝は「難波宮を通り過ぎて浜り賜ふ」とし新編全集などが支持するが、「宮上る」は宮へ上る意だから、なお不審が残るとある程度の留保をする。それらに対し守部の言別が「宮上り」を「葛城高宮」とし、古代歌謡全注釈などが従っている。それらの説を踏まえて山崎かおりが「宮」と「上る」の用例を検証し、次のように結論付ける。

「宮」の語は、記紀においては政治の中心にいる人物の住居を指すものであり、「上る」とは上京するの意である。石之日売の歌謡「宮上り」とは、自分の故郷の葛城の家を「宮」、すなわち皇居と同等のものととらえ、そこ



へ上京するということを意味するものである。<sup>(8)</sup>

山崎論文は、別にイハノヒメに対して「幸ます」などと、イハノヒメに天皇と同列の表現が見られることから、イハノヒメが天皇と同レベルに扱われ、対抗的に描かれていることを指摘している。確かな用例検証に基づく見解なので、傾聴すべき部分もあるが、仁徳記においてはイハノヒメが天皇と対抗的に描かれているとまでは言えないのではないか。前掲の古事記歌謡五七が天皇讚美歌であることを踏まえるならば、次の五八歌で天皇に対抗する意を示すことはないだろう。尤も、前掲山崎論文では古事記歌謡五七歌は賛歌というより、天皇への皮肉と解している。古事記歌謡五七に相当するこれも前掲の書紀歌謡五三は天皇讚美の要素が少ないので、皮肉という解釈も当てはまると思われる。前述したように、仁徳紀では天皇との歌のやり取りでイハノヒメが天皇に反発することが強調されていたからだ。しかるに、古事記はそのような天皇への反発よりも後妻である相手の女性に対する「嫉妬」が中心であるから、古事記歌謡五八は、イハノヒメ自身が故郷葛城高宮を遠望することで自らの気持ちを鎮めていくと解されるのではないか。因みに、古事記歌謡五八の「宮上り」に関して古事記注釈がその前の歌五七の「河上り」を言い替えたと見ており、そのような理解も可能ではある。要するに、仁徳記と仁徳紀では、同様の内容であってもイハノヒメの描かれ方に差異があることに留意する必要がある。

次に仁徳記の他の志都歌歌返を挙げてみる。

山代に い及け 鳥山 い及けい及け 吾が愛し妻に い及き遇はむかも (古事記歌謡五九)

御諸の 其の高城なる 大猪子が原 大猪子が 腹にある 肝向ふ 心をだにか 相思はずあらむ (古事記歌

謡六〇)

つぎねふ 山代女の 木欽持ち 打ちし大根 根白の 白腕 枕かずけばこそ 知らずと言はめ (古事記歌謡

六一)

右の五九番歌は、天皇が鳥山という使いを遣わせた時に鳥山に歌いかけた歌、六〇、六一番歌は、同じく天皇が丸邇<sup>わたの</sup>口子を派遣させて、序詞を用いて自らの思いをイハノヒメに伝えようとした歌、特に六一番歌の「白腕」は、古事記神代記のヤチホコノ神の神語の中で、ヤチホコノ神のヌナカハヒメへの歌（古事記歌謡三）、スセリビメのヤチホコノ神に対する歌（古事記歌謡五）に「白き腕」とあるのを踏まえていとも言える。ただ、天皇の歌にイハノヒメは反応することはない。そこで口子臣と妹のクチヒメ、筒木のヌリノミの三人が一計を案じて、皇后が三色に変わる奇しき虫（蚕）を見たいと思つて筒木に来たので、天皇もその虫を御覧になりませんかと誘つたので、それを口実に天皇は筒木を訪れ、「大后の坐せる殿戸」に立たれて次の歌を歌われたとする。

つぎねふ 山代女の 木鍬持ち 打ちし大根 さわさわに 汝が言へせこそ 八桑<sup>やがはえ</sup>枝なす 来入り<sup>い</sup>参み来れ

（古事記歌謡六三）

これら天皇と大后の歌つた六つ歌を「志都歌の歌返」というのだという。「戸」を境に歌を歌い掛けるのはヤチホコノ神の神語などにも見られる問答歌の様式である。ここでもイハノヒメからの答え歌は記述されていないが、「志都歌の歌返」の後半は天皇がイハノヒメの「嫉妬」する魂を鎮めようとはしている。

一方、仁徳紀三〇年九月から十一月には、天皇の歌の順や歌に古事記との差異が認められ「志都歌の歌返」という記述もない。ただ、天皇の歌に応じて、皇后は

「陛下、八田皇女を納<sup>め</sup>れて妃としたまふ。其れ、皇女に副ひて后<sup>た</sup>為らまく欲<sup>ほ</sup>せず」

と言われ、天皇と会おうとはしなかつたという。天皇は皇后が「大きに忿りたまふことを恨みたまへども」なお「恋ひ思ほすこと有ります」という。この仁徳紀では天皇と皇后の気持ちの食い違いがあり、対話も成立していない。

そして、仁徳紀三五年皇后イハノヒメが筒城宮で薨去したことも古事記と相違している。要するに、仁徳紀では仁徳記に比してイハノヒメの「怒り」は鎮まることがなかったと言える。そのイハノヒメの気持ちの鎮魂が、万葉集巻二冒頭の天皇を慕う相聞歌四首の生成に寄与したのではないか。飯泉健司は記紀と万葉集の仁徳とイハノヒメの愛情を同等として結びつけているが、<sup>(10)</sup> それぞれの表現上の差異は認めるべきである。万葉集のイハノヒメ相聞歌の生成は様々に説かれており、<sup>(11)</sup> ここでは多岐に亘るので深入りしない。

#### 四 琴歌譜の「歌返」「茲都歌」と注記

「志都歌の歌返」の「歌返」は音楽上の韻律を指すと思われるが、平安朝初期に記載された琴歌譜の中に「茲都歌」の次に「歌返」と題された歌が収載されている。

鳥国の 淡路の三原の篠 さ根掘じに い掘じ持ち来て 朝妻の 御井の上に植多つや 淡路の三原の篠（琴歌譜二）

淡路の三原の篠を根掘じに掘り取って朝妻の御井の上に植え替えるなどという意だが、この歌謡には何かの背景があるようだ。その手掛かりの一つに「根掘じ」が特殊な場で用いられる語であることが挙げられる。神代記の天石屋戸の条で、<sup>(12)</sup> 隠ったアマテラスを誘い出す祭をする場面で「天の香山の五百津真賢木を根こじにこじて」、他に仲哀紀八年正月に筑紫の伊都県主の祖イトテが天皇の巡行を聞き「五百枝の賢木を根こじにして」とあり、ともに祭祀の準備のために樹木を「根こじに」したという事例が見られる。これから考えるに、右の琴歌譜二も本来は何かの祭祀に関わる歌謡であったことが想定される。

それとは別に、他の琴歌譜にもあるが、この歌には複数の注記が記されており、第一の注記によれば、次のような状況の歌だという。仁徳天皇が八田皇女を妃としようとした時、皇后が大いに恨んだので、天皇は八田皇女の許にお出ましになれずに皇女を恋思い、平群と八田山の間でこの歌を作られた、ただし、日本紀や古事記と校合しても見られないという。このような注記が付せられるのは、「朝妻」が前掲の仁徳紀の天皇とイハノヒメとの歌のやり取りにも見られた大和葛城の地名であることが一つ考えられるが、これらと状況が異なるので、それ以上は何とも言えない。次の第二の注記では、皇后息長帯日売（神功皇后）が那羅山を越える時に葛城を望見した時の作とする。これも仁徳紀のイハノヒメの行動に基づくとも言えるが、それを神功皇后としていることが記紀とは異なる。賀古明は、息長帯日売の母が葛城高（高）額媛と伝えられていることと、イハノヒメが葛城出身であることで人名の錯誤が生じたのではないかと推測する。第三の注記では、誉田天皇（応神）が淡路島に遊獵した時の時人の歌とある。勿論記紀には右の琴歌譜の歌謡は見られないものの、応神紀一三年三月、二二年九月条に天皇が淡路島に遊獵や狩に幸ました記事が見えるので、そのいずれかの時の歌作とされた可能性もある。賀古明が指摘するように、琴歌譜の注記に平安初期の日本紀講が反映されているとすれば、あり得なくはない。特に第一の注記は仁徳天皇、八田皇女、皇后をめぐる異伝のようなものとして伝わったものかとも思われる。琴歌譜では右の「歌返」の前に「茲都歌」が記載されているので、この歌が「茲都歌」の「歌返」であるならば、仁徳天皇、八田皇女、皇后と結び付けられるのも一応の理解はできる。しかし、琴歌譜の「茲都歌」は仁徳天皇とは関わらない歌である。

御諸（みもろ）に 築（つく）くや玉垣 齋（つく）き餘す 誰にか依らむ 神の宮人（琴歌譜一）

この歌は琴歌譜注記にも記すように、雄略記で天皇がアカキコへ歌った歌で、古事記にも「志都歌」として収載され、琴歌譜の注記では雄略記の要約のような文が付されている。ただし、琴歌譜の注記においては、右の歌が最

終的にはその雄略記の縁起は歌と異なっているとし、「一説云」として別の縁起を記す。その別縁起によれば、崇神天皇の皇子の垂仁天皇の御代に、天皇とその妹のトヨスキイリビメが御諸山の神を拝祭された時の歌で、その方が正説に似ているとする。崇神記（紀）の伝えではトヨスキイリビメはアマテラスを祭ったが、垂仁紀二五年三月にアマテラスの祭主をヤマトヒメに交代したという。琴歌譜の注記と記紀では祭神に差異はあるもの、トヨスキイリビメは長年神に仕える巫女であったという点で通じるものがあり、右の琴歌譜一の縁起としても一応齟齬はなく、古事記よりも日本書紀に近い伝えを重んじるという琴歌譜の注記の立場からすれば、琴歌譜一の「一説云」を正説とすることは理解される。いずれにしても、琴歌譜一は御諸の神に長年奉仕して来た「神の宮人」を労うような内容の歌である。

## 五 雄略天皇とアカキコ「志都歌」

次に、雄略記のアカキコの話を要約し、その中で歌われた歌を挙げる。

天皇が遊行して美和河に至った時に、川辺で衣を洗う「童女」せとめがいた。その容貌が甚だ「麗し」かったので、その童女に天皇が「汝は誰の子ぞ」と問うと童女が「引田部の赤猪子（アカキコ）」と答えた。そこで天皇は「誰とも結婚せずにいろ。そのうち喚そう」と言われて宮に還った。その後アカキコは天皇の命令を待つて八十年が過ぎた。赤猪子が思うに、「命令を待つて長年経った。体も痩せて恃むところがない。待ち続けた情を顕さなければ、「いぶせき」に忍えられないと思ひ、百取りももの机代つくえしろを持たせて宮に参上した。天皇は前の約束を忘れていて、やつてきた赤猪子に「どこの老女か。どうして参り来たのか」と聞いた。アカキコが事情を説明すると、天皇は大いに驚い

て、先のことをすっかり忘れていた、命令に従って盛りの時を過ぎたことは「甚愛しく悲し」と心では婚まわむと思つたが、相手がきわめて老いていてそれでもできないので、悼なんで歌つたのが次の二首である。

御諸の 蔽いづかし白しろ檀たんが下 白しろ檀たんが下 忌々いひしきかも 白しろ檀たん原はらをとめ (古事記歌謡九一)

引田の 若わか来く栖す原はら 若わかくへに 率ひ寝ねてましものを 老おいにけるかも (同九二)

右の二首を聞いたアカキコは丹に摺ずの袖を濡らして答え歌を歌う。歌謡九三は前掲琴歌譜一と同歌で、続いて

日下江くさかえの 入いり江えの蓮はす 花蓮 身の盛さかり人 羨としきろかも (同九四)

とアカキコが歌つたのに対して、天皇は多くの禄を老女に給いて返した。これらの四歌は「志都歌」である。

アカキコの話は旧稿でも取り上げたので、一部重なる部分もあるが、旧稿とは異なる観点から検証していく。まず水辺で「童女」に逢う点である。古事記で「童女」とあるのは、上巻でスサノヲが出逢つたクシナダヒメ、雄略記でアカキコの次に登場する「吉野の童女」であるが、いずれも水辺という境界に出現する巫女的存在であることは既に指摘されている。特にアカキコの場合はその後老女として再登場するので、その老女との対比で「童女」が強調された面が大きい。その「童女」が「麗し」と形容されるのは、コノハナノサクヤビメなどの例に見られるように、神婚神話のをとめの類型に則したがっている。そして名を聞かれて名告なるのもコノハナノサクヤビメと同様だが、コノハナノサクヤビメの名告りがオホヤマツミという親の名を示し系譜を明らかにするのに対して、その「童女」の名告りは簡略で正式とは言い難い。それでも名告りは服従の意を表すから、天皇はアカキコに後に召すと申し渡して宮に戻る。その後八十年を経てアカキコは「いぶせきに忍しのへず」して、百取りの机代を持たせて宮に参上するが、コノハナノサクヤビメの場合には父のオホヤマツミが百取りの机代を持たせており、その点から言えば、アカキコはコノハナノサクヤビメのパロディとして描かれている。天皇は老女と化したアカキコのことを失念していた

のだが、さすがに長年待たせたアカキコ「愛しく悲し」く思い、九一番歌を歌う。九一番歌は物語に即せば「童女」であったをとめを「忌々しきかも」と異界に接する存在として敬っている。

次の九二番歌は「わかか」であったことが強調され、「老い」と対照されるが、「わかか」に関しては、清水章雄が

〈ふるも〉も〈わかか〉も彼此両世界の接点である。とりわけ、彼岸の世界の力を凝集しているかのような始まりの時の感動が〈わかか〉なる語に込められている。<sup>15)</sup>

と論じており、「わかか」と「老い」「ふる」は双方異界と接していることを意味し、その面で九一番歌の「忌々し」と通底している。「老い」と「忌々し」ともに讚美表現の一種で、それらの語を用いたこれらの歌は、対象であるアカキコの「いぶせき」情を鎮めていると解される。

それに答えたアカキコの九三番歌は「つきあまし」を「築き余し」（記伝）とするか「斎き余し」（言別）と解するがで分かれるが、吉永登は後者説を採用し、余りにも永く神に奉仕し過ぎしての意と説いている。<sup>16)</sup>特に、琴歌譜一の注記の第二ではその後者説に基づいている。「誰にかも依らむ」の「か」を疑問と取れば老いの歎きが強調され、反語（言別説）とすれば誓いの気持ちが前面化するが、その後の天皇の対応からすれば、後者の方が妥当である。島田晴子、身崎壽は「誰にかも依らむ」を解して、あなた以外の誰を頼りましょうかなどと、天皇へ向かう気持ちを叙したとする。<sup>17)</sup>これらに従えば、九三番歌は九一番歌に応じて御諸の神に長年奉仕していた「神の宮人」であったことの誓約を確認すると同時に、天皇への讚美ともなる。

次のアカキコの九四番歌は前歌に対して「日下江」を詠みこんでいるので、問答歌として異質である。この歌は「日下江の」で始まり、「身の盛り人」と続くので、それらをアカキコの話の前に雄略と婚したワカクサカベを示すとする解が多く行われており、品田悦一は、アカキコの話を雄略とワカクサカベの成婚の「もどき」と見ている。<sup>18)</sup>興

味深い見解だが、「身の盛り人」はワカクサカベとともに、身崎が説くように、雄略も指し示すのではないか。諸注指摘するように、アカキコが八十を超えた老女であるにも拘わらず、雄略が年老いていないように描かれているのは、アカキコとの話が滑稽なをこ話という側面を有することは否定し得ないにせよ、雄略はあくまで「ワカタケル」であり、その「老い」に対抗する「わかさ」が強調、讚美される必要があったからではないか。

そして、雄略とアカキコとの問答歌が「志都歌」と名付けられたのは、アカキコの恋愛感情に基づいた「いぶせき」情を鎮めるとともに、天皇を讚美することで結果的には天皇の「愛しく悲しき」という、これも恋愛から派生した情をも鎮めるという意味で、先の仁徳とイハノヒメの「志都歌の歌返」と通底する鎮魂という機能を有したものと考えられる。<sup>19)</sup>

## 六 ヲドヒメの「志都歌」と「枯野の琴」の「志都歌の歌返」

記紀歌謡の中に「志都歌」はもう二首見られ、その一つが雄略記の春日ノヲドヒメが天皇に献じた歌である。

やすみしし 我が大君の 朝には い寄り立たし 夕には い寄り立たす 脇机が下の 板にもが 吾兄  
を (古事記歌謡一〇三)

この歌は雄略記では新嘗祭の豊楽の際の一連の歌群の最後に位置している。それらの歌群は、天皇が三重采女の非礼に怒って殺そうとした時、その怒りを鎮めようとして歌ったという「纏向の 日代の宮」で始まるよく知られた歌、大后ワカクサカベの天皇への勸酒歌、それに応じて天皇が「大宮人」の群がつて酒を飲んでいる様を歌う三首の「天語歌」(古事記歌謡九九〜一〇一)、同日の豊楽に酒を献じた際の天皇の「宇岐歌」と続く。





がないように見えるので、従来は「志都歌」一般として論じられることはなかった。そこで、前述の琴歌譜の「歌返」と対比してみるとどうだろうか。琴歌譜の「歌返」は前述したように、内容的にはいずれかの祭祀に用いるために樹木を根こそぎ植え替えるというものであったと考えられる。大樹を琴に作る「枯野の琴」に「志都歌の歌返」の歌曲名があることと、琴歌譜の「歌返」が大樹の植え替えの歌というのは、双方に幾分かの繋がりを感じさせる。

それにしても、樹木を介した繋がりを感じ可能なそれらの歌と、それ以前に扱った仁徳天皇とイハノヒメ、雄略天皇とアカキコ、雄略天皇に対するヲドヒメの「志都歌」、「志都歌の歌返」は、一見何の接点もないかのように見える。つまり、樹木に対するものと、人間の嫉妬や怒りに対する鎮魂、これら別物に見えることに何らかの脈絡があるのか。そこで想起されるのが「草木言語」などという表現<sup>22)</sup>、あるいは万葉集に見られる「寄物陳思」という歌の様式である。それらは比喩というよりも、古代においては樹木や自然と人間とが融即的に通底する位相があると見なされていたことの表れであり、そのことを前提にすれば、樹木と人間の嫉妬や怒りに対する鎮魂の歌が、「志都歌」「志都歌の歌返」という共通項で括られていても支障はないということになる。

## 結

以上、古事記歌謡、琴歌譜に記載された「志都歌」「志都歌の歌返」（琴歌譜の場合は「玆都歌」と表記）という歌曲名の歌謡を検証して来た。その結果、その歌曲名は歌い方からの命名でもあっただろうが、内容的にも幾つかの共通項を見出すことが出来た。それは、恋愛などから派生する「嫉妬」や怒りなどを歌によって宥め、讚美することによって鎮魂していくという歌の機能であり、その対象は登場人物に留まることなく、樹木やそれから作られた楽器

などにも適応されていた。人と樹木という全く異なる対象に対して同様の歌曲名が用いられること、その融即性に古代文学の呪性的一端が覗き見られるのではないか。

注

- (1) 勝俣隆「浦島伝説に於ける玉匣（玉手箱）について」（『異郷訪問譚・来訪譚の研究―上代日本文学編』和泉書院 二〇〇九年）。
- (2) 青木周平「記紀における歌謡と説話」（『古代の歌と散文の研究』おうふう 平成二七年）。
- (3) 吉田修作「神話と天語歌―古事記の上巻・中巻・下巻の繋がりを通して―」（『日本文学』二〇一七年一月）。
- (4) 例えば、曾倉岑は「人間にとって嫉妬なるものはきわめてありふれた感情である。」などと、イハノヒメの「嫉妬」を一般化してしまっている「イハノヒメの嫉妬」（『日本文学研究資料叢書 古事記・日本書紀Ⅱ』有精堂 昭和五〇年）。
- (5) 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』角川書店 昭和四七年など。
- (6) 斎藤英喜「皇子と異教―菟道稚郎子伝承をめぐって―」（『語文』八一号 平成三年一月）。
- (7) 青木周平は仁徳記と仁徳紀「那羅山の山口」と「那羅山を越えて」の差異に注目している（青木前掲論文 注2）。
- (8) 山崎かおり「石之日売命の歌謡―「宮上り我が上れば」を中心に―」（『古事記』大后伝承の研究）新典社 平成二五年）。
- (9) 岡部隆志「戸をめぐる表現」（『古代文学の表象と論理』武蔵野書院 平成一五年）。
- (10) 飯泉健司「仁徳朝とイハノヒメ物語―人の世の知恵と情―」（『國學院雑誌』一一五卷一〇号 平成二六年一〇月）。
- (11) 万葉集のイハノヒメの相聞歌の生成については、続日本紀天平八年の光明子立后の宣命にイハノヒメの事跡を讀んでいるのを重要に考える直木孝次郎「磐之媛皇后と光明皇后」（『飛鳥奈良時代の研究』塙書房 昭和五〇年）、女帝や後宮を背景として伝承醸成されたとする三谷栄一「記紀から万葉集へ―万葉集卷二の冒頭歌をめぐって」（『國學院雑誌』七〇卷一―一九六九年一月）など様々存在する。
- (12) 加古明「茲都歌」「歌返」（『琴歌譜新論』風間書房 昭和六〇年）。
- (13) 吉田修作「（言）と琴」（『古代表現論』おうふう 二〇二三年）。
- (14) 吉田修作「託宣と神婚伝承」（『憑り来ることばと伝承』おうふう 二〇〇八年）。

- (15) 清水章雄「わか」(『古代語を読む』桜楓社 昭和六三年)。
- (16) 吉永登「巫女の嘆き」(『萬葉』その異伝發生をめぐって) 万葉学会 昭和三〇年)。
- (17) 島田晴子「赤猪子の歌謡物語」(『論集上代文学 八冊』笠間書院 昭和五二年)。島田論の当該物語の歌謡の解釈は首肯されるものがある反面、歌の順序を替えたり、他の場面の歌謡を取り入れたりして、恣意的で従えない部分もある。身崎壽「ウタとともにカタルー赤猪子物語論」(『萬葉』二〇四号 二〇〇九年四月)。
- (18) 品田悦一「歌謡物語―表現の方法と水準―」(『國文学』学燈社 三六卷八号 平成三年七月)。
- (19) 畠山篤「赤猪子の復権―陰の女の極北―」(『國學院雜誌』八七卷九号 昭和六一年九月)。畠山論は当該物語の歌謡の解釈は参照されるが、それらに鎮魂の機能があることの説明がない。
- (20) 吉田修作前掲論文(注3)。
- (21) 吉田修作前掲論文(注13)。
- (22) 吉田修作「混沌からの声」(「ことばの呪性と生成」おうふう 一九九六年)。